



## 七 自己嫌悪

---

俺は大統領だ。この国だけでなく、世界をもリードしていかなければならない。それが、俺の仕事なのだ。だからこそ、俺は、積極的に発言しているんだ。

「少し、言い過ぎのところがありますけど」

言い過ぎだって？人は言わないとわからないんだ。どこかの国のように、忖度だなんて言葉があるから、相手が勝手に推測して、あなたのためにこれこれをやりました、と言わんばかりだ。

俺は、そんなことを露とも、雨の一滴たりとも望んでいないのに、相手は俺のためだと、半ば、強制的に、俺に感謝しろと、自分を誉めろと、口には出さないものの、ただ黙って、俺の眼を見つめる。まるで、俺に忖度しろと言っている。いや、黙っているから、言っただけじゃないか。

俺はそれが嫌だからこそ、俺が思うこと、やって欲しいことをはっきりと、誰もが忖度をしないで済むように、明言しているだけなのだ。

「でも、一旦、口に出してしまえば、修正や訂正、なかったことに出来ないのではないですか」と尋ねる人もいる。

だからこそ、俺は正々堂々と口に出しているのだ。言ったことは事実として残る。だから、あえて口に出す。後から、他人に批判や非難をされて、修正や訂正しても、俺の本音は残る。この本音を残すことが大事なのだ。

相手には、俺の本音が伝わっているから、それなりに用心してくる。俺は、訂正はしたけど、それは本意ではないことを相手に上手く伝えたことになる。いざ、その訂正を再度、訂正したとしても、俺は元の本音に戻っただけだ。相手に、心変わりだと責められても、元に戻っただけですと突っ張ればいいんだ。

「人の言うことを聞かない、自分の意見しか言わない、自分の意見を他人に押し付けている、強制している、という人もいますけど」

しゃらくせい。人は何とでも言うもんだ。だが、その発言は、事実と反している。俺は、何も考えていない。どうしたいとも思ってもいない。俺がしたいのは、俺が命令すれば、この国だけでなく、世界中が俺の言葉に、命令に従うことだけなのだ。俺は、それがやりたいたいだけなんだ。

俺を支持してくれる奴がいるならば、俺はそいつが言うことを何でもしてやる。その代わりに、俺を支持してくれることが条件だ。俺は気が小さい、気が弱い。だから、気が大きい、気が強いふりをしているだけなのだ。俺のいつ消えてしまうかわからないような気を支えてくれるのが、国民の皆様の支持なわけだ。

だから、俺のやりたいようにやらせてくれる国民の皆様に言うことには、耳を貸す。おかげで、右耳は、大きく肥大し、耳の穴も車が通れるくらいに、大きなトンネルとなった。だけど、左耳は違う。あるかないかくらいに耳たぶは小さくなり、耳の穴は既に塞がれている。だから、俺を支持してくれる人の意見は確実に俺の頭に残るのだ。

なんでも物事は、全てがバーターだ。互いがウインウインの関係でなければならない。だから、国民の皆様が俺を支持してくれば、俺はその期待に応えるわけだ。

「大統領。そろそろ、列車の発車の時間です」

ああ、わかっている。俺は大統領だぞ。それなのに、なんで、庶民と一緒に金河か銀河かわからないけれど、宇宙列車に乗らないといけないんだ。何度も言うけれど、俺は、大統領だぞ。大統領専用の宇宙列車があってもいいはずだ。何？この国の人を一人でも多くの人を宇宙列車に乗せないといけないので、そんな余裕はありません、だと。そんな奴は乗せなくてもいい。俺だけではいいはずだ。何？全ての人が大統領の支持者だと。それなら許してやるか。

何度も言うけれど、俺は何かをしたいわけではない。俺を大統領として認めてくれればそれでいいのだ。俺はそいつの言うことなら何でも聞いてやる。

「もう、時間です。席を立ってください。壁の方に進んでください」

壁か。壁と言えば、俺を支持する国民の皆様と俺に批判的な馬鹿な奴らとを分断する壁の建設はどうなっているんだ。俺を支持する国民の皆様は賛成してくれたのに、俺に批判的な馬鹿な奴らは何でも反対ばかりだ。もう少し、考えてくれないといけない。俺がやることを反対ばかりしている。

物事には、何でも良い面と悪い面がある。プラスもあればマイナスもある。長所もあれば欠点もある。それらを比較検討して、賛成か、反対かを定めるべきではないのか。それなのに、あいつらは俺がなすこと、すること、はてまた、言うこと、呼吸することさえも全て反対しやがる。

何度も言うけれど、俺は何がしたいということはない。俺を支持する国民の皆様の言うことをやっているだけだ。俺を批判する前に、俺を支持する国民の皆様を非難して欲しい。そっちが

先だろう。それなのに、俺を非難ばかりする。俺がいくら強気なふりをしている人間だからと言っても、批判、非難ばかりされていると、つい、本音が出て、気が弱くなってしまわないか。

「時間ですよ」

ああ、わかっている。行くとも。行くとも。こうなったら、どこへでも、誰とでも行くぞ。矢でも鉄砲でも、罵詈雑言でも飛んで来い。ああ、そうか。いいことを思いついた。

俺を支持する皆様だけで、国をつくれればいいんだ。俺を悪しざまに言う奴らは、別の国に追い出した方がいいんだ。そのためにも、壁がいる。鳥さえも飛び越えることができない高い、高い壁が、そして、ありさえも侵入できないような隙間のない、世界一周でつながる億万里の長城だ。

だが、壁だけでは心配だ。敵に周囲を包囲されたら、いくら億万里の長城があっても、籠城戦になれば、いつかは門を開けざるをえなくなる。そのためには、相手を封じ込める必要がある。そのための壁が必要だ。

そのためには、他国への領土侵略が一番てっとり早い。正義は力だ。力が正義だ。俺に支持と言う力を与えてくれる皆様たちの国をどんどん広げていこう。領土は、地面だけでない。海も領土だ。世界中の島も自分の国にすればいい。海だけではない空もだ。空を制するためにも、地球の周りに人工衛星を網の目のように配置し、大気圏外から、相手の攻撃を止めたり、攻撃をしたりするんだ。

どうだ。俺の戦略は。すごいだろう。これで、反対勢力も息の根を止めることができるぞ。俺への反対の声さえ上げることができなくなる。そうなれば、この国だけでなく、この地球全体の大統領に俺はなれるぞ。間違いない。

ええ？この地球の自転が遅くなって、太陽の光が射すところは灼熱の世界、光が射さないところは、反対に氷の世界だと。それじゃあ、人は住めないじゃないか。だから、地球を脱出して、新たに新地球に移住するのか。そんな話は聞いていないぞ。それに、新地球では、誰が大統領になるんだ。選挙をしたら、俺が大統領になれるかどうかはわからないじゃないか。

ええい。それなら、俺は地球に残る。俺以外の奴は、みんな新地球へ行ってしまう。そうすれば、戦争を始め、関税の大幅な引き上げや核実験施設の廃棄、食糧や石油の輸出を制限しなくても、俺はなんなく、この地球の大統領になれるわけだ。

「勝手にしろ。どうぞ」

その言葉と共に、部下たちが去って行った。俺は、晴れて、名実ともに、この地球の大統領になった。

「大統領のことを目が見えていないという人もいますが」

なんだ。お前は、部下でもない、単なる報道記者のくせにまだいたのか。それなら、答えてやる。目が見えているからこそ、壁を作ったんだ。俺の支持者が貿易で損をしているというから、他の国からの輸入商品には高い関税をかけてやった。俺の国の方が巨大な戦力を保有し、いつでも壊滅はできるけれど、窮鼠猫を噛むような兵器を持っている国には、他の国への見せしめのためにも、俺の国にある資産を凍結したり、他の同盟国と一緒に、食料品などの輸出を止めてやった。

これで、かの国民が困るだけだと訳のわからない批判をする奴がいるけれど、かの国は、独裁政権で、この政権を転覆するためには、かの国の主導者が悪いという印象を国民に知らしめる必要がある。その後には、かの国の主導者で、仲間割れした一味をかの国の指導者に置き換えて、今度は、俺の言うことに従う傀儡政権の独裁国家を作ることが俺の夢だ。いや、違う。これも、俺の支持者の声だ。

「大統領。ある高名な画家が大統領の自画像を描いたという話を聞きましたが」

何。俺の自画像？それはいい。ついでに、ある高名な芸術家に依頼して、銅像、いや、銀像、こうなったら、金像も作ってもらえばいい。

どれどれ、早速、絵を見せてくれ。何だ。これは。俺は真っ裸じゃないか。俺を馬鹿にしているのか。俺を裸の大統領とでも言いたいのか。そんなネタはありふれ過ぎて、陳腐すぎるぞ。まさか、これでインタビューを終えようと言うんじゃないだろうな。

「いいえ、違います。ある高名な画家は、大統領の姿にギリシア彫刻をインスピレーションされたそうです」

そうか。ギリシア彫刻か。確かに、俺は、これまでの風習を打ち破って、新しい時代を切り開いてきた。その斬新さと力強さがギリシア彫刻と結びついているんだろう。これまでの古い神という名の因習を打破し、赤い血の流れる人間の復活を果たしたんだ。

何？だから、大統領は、いつも赤いネクタイをしているのか、だと。俺は、赤いネクタイが好きなのわけではない。だって、そうだろう。ネクタイを選ぶときは、確かに色や柄を見るかもしれな

いが、一旦、身に着けてしまえば、いちいち、顎を下げて、ネクタイを見る奴なんていない。ネクタイは自分のためじゃなく、相手に見せるためなんだ。赤は何しろ、目立つし、相手に注意を引き、一瞬、畏怖さえ感じさせる色なんだ。多分、それは、血の色を思い出させるかもしれない。相手を自分の支配下に置くためには、赤が一番いい。とにかく、この自画像は、俺にそっくりだ。似ていないけれど、そこがそっくりだ。感謝する。

地球最大の正負の遺産と言われた、過去の大統領の言行録を記憶したA Iは、新地球に持っていくには荷物になる、邪魔だと言われ、そのまま廃棄されることになった。新地球でも、歴史は繰り返されるのに。